

平成29年 第1回JSR編集委員会 議事録

日時：平成29年4月13日(木) 7:00～8:00

会場：ロイトン札幌 2FクリスタルC

出席：中村博亮(理事)、川口善治(委員長)、青田洋一、赤澤 努、石井 賢、伊東 学、
江幡重人、寒竹 司、税田和夫、二階堂琢也、長谷 斉、長谷川和宏、福岡宗良
平林 茂(アドバイザー)

(以上、14名)

陪席：CBR 三輪氏、JSR 編集分室 尾島氏、JSSR 事務局 鈴木めぐみ

議題1 『JSR』第8巻広告申込の件

川口委員長が、8巻の広告について一覧を提示し報告した。今年も例年通り秋ごろに委員から企業へ声かけを行ってもらう予定であると説明した。

また、8巻では「表3」で毎年広告出稿をしていた企業から取りやめの連絡があり、急遽別の企業に出稿してもらったと報告した。

議題2 『JSR』審査状況の件

川口委員長が、3月22日現在の審査状況リストを説明した。58編の投稿があり、現状掲載数や投稿数に不足があるかと編集分室の尾島氏に問い、尾島氏が十分であると回答した。

平林アドバイザーが、どのような理由で不採用になったかと問い、川口委員長が二人の査読者がD判定をつけたか、査読結果が割れた場合は委員長も査読に加わり、最終判定をしていると解答した。

長谷川委員が、依頼論文で不採用となった例があるようだと質問し、川口委員長が依頼時に「依頼論文であっても査読がある」との旨伝えていることもあり、特に不採用になった依頼論文の執筆者からクレーム等はいただいていないと回答した。

青田委員が、明らかに依頼論文と思われるものを査読したことがあるが、別の雑誌に原著論文として投稿したようで、総説として出しなおしていたが、そういった様式変更での投稿でも問題ないと依頼時に伝えたほうが親切だと思うと意見を述べた。

議題3 『JSR』第8巻の進行の件

川口委員長が、各学会の代表委員に現在の雑誌投稿の進捗等の発言を求めた。

東海脊椎脊髄研究会・・・福岡委員が、学会に2つオフィシャルジャーナルがあるため、

掲載論文を2冊に振り分けているが、今年も特に数量や内容等問題なかったと報告した。

日本腰痛学会・・・二階堂委員が、例年のことではあるとしながら、11月の学術集会での発表を12月投稿締切で募っているため、なかなか原稿が集まらず、最終的に厳しいスケジュールになっていると報告した。

日本脊椎・脊髄神経手術手技外科学会・・・長谷委員が、25報投稿があり、査読結果を受けて、2稿、3稿に進んだところであると報告した。

日本脊椎低侵襲外科学会・・・江幡委員が、22報投稿があり、2度目の査読を実施中と報告した。

成人脊柱変形・・・長谷川委員が、西日本脊椎研究会が1冊の発刊になった分を補うために、長谷川委員が会長を務めた成人脊柱変形研究会での発表者に声かけをしたことを説明した。発表者へ投稿を募ったが、現時点で5報ほど掲載が確定しており、あと2、3報は確定しそうなので、最低でも7、8編は掲載できそうであると報告した。

このように若手を中心とした勢いのある団体に声をかけて、特集号を組んでいくのもよいかもしれないと意見を述べた。

川口委員長が、JSRの1号分を今後も担っていくのはどうかと問い、分担金の150万円を支払うのが困難なため、難しいと回答した。

日本脊椎インストゥルメンテーション学会・・・伊東委員が、現状24編の投稿があったこと、今まではD判定であれば結果だけを伝えていたが、Dになった理由等のレフリーステートメントについても教育のために著者へ伝えることにしたと報告した。

川口委員長が、『JSSR』の特集号の場合、レフリーステートの査読結果は著者へ伝えていたかと質問し、尾島氏が伝えていると回答した。

日本側彎症学会・・・赤澤委員が、現状20編ほど投稿があったと報告した。また和文の症例報告に少し手を加えて再度投稿されたものがあったが、二重投稿とみなされそうなものであったことから、著者とも協議し、著者から取り下げられたと報告した。

西日本脊椎研究会・・・寒竹委員が、現状20編程度の投稿があると報告した。

また、川口委員長が、英文のオフィシャルジャーナル『SSRR』が今年1月に刊行されたため、英文での投稿は減ってきているが、『JSR』へ英文で投稿したいとの希望があった著者の論文については査読中であると報告した。

議題4 JSR 投稿時の選択および付記の件

川口委員長が、昨日中村理事が評議員会で報告した投稿規程の付記については、可能な限り早く反映させ、学会誌とHPへ掲載予定と発言した。

編集分室の尾島氏が、投稿規程のどの部分に掲載するかと問い、一番下に掲載することになった。

本付記について、以下の議論があった。

青田委員：二重投稿と二次出版の違いはなにか。

中村理事：日本医学雑誌編集者会議のガイドラインに記載されている内容であるが、二次出版は、初出の掲載以降一定の期間（1週間など）をおいて、異なる読者層を対象として出されたもので、二次出版で折る旨の明記がなされていけば問題ない、というもの。ただし同ガイドライン中には二重投稿についての記載はない。

長谷川委員：ガイドラインの「異なる読者層」の定義はどのようなものか。

中村理事：ファジーであり、特に明記されていない。そういった意味では、英文を和文にただけの翻訳でも二次出版の明記がなされていけばよいとも考えられる。

長谷川委員：初出の論文と、二次出版の論文は、2つの業績として認められるか。

中村理事：認められない。初出の論文のみ認められる。

青田委員：二次出版を明記する、というのがそれはどの部分に明記されるのか。

中村理事：フットノートに明記する。

税田委員：二重投稿についての罰則が設けられていることがあるが、当学会ではどうか。

川口委員長：現状は定めていない。

平林アドバイザー：罰則を設けるのであれば、審査においても厳重であることが求められる。ただ、もし二重投稿に気づかず『JSR』に掲載してしまい、部外者等から指摘があっても、JSR 編集委員会内で可能な範囲でチェックして出版したものであるから、それに対して罰することはしなくてよいと考える。

中村理事：投稿規程に、付記を加えることで、二重投稿については相当の抑止力になるはずである。

青田委員：審査中に二重投稿と気づいた論文については、二次出版として形式等を変えての投稿を著者に勧めてはどうか。

長谷川委員：二次出版は業績としては認められないので、形式を変更で投稿することを勧めるほうがよいと考える。

議題5 その他

・分担金の件

福岡委員が、分担金の150万円については変更がないかと尋ね、中村理事が今年度の決算の繰越金が多くなかったこと、雑誌の発行・発送で4000万円（電子版経費約90

0万円を除く)かかっているため、現状は厳しいが、今後印刷費や発送費などの経費が減れば認められやすくなると考えると回答した。

長谷川委員が、国際誌等でも同様の問題が起こってきており、抜本的な改革としては完全電子化を果たすことだと意見を述べた。

川口委員長が、オンラインの雑誌はすでにHPに掲載されていると補足した。

中村理事が、毎年10月に実施している紙媒体学会誌要不要調査には、現状は項目が「要か不要か」しかないが、会員が紙の状態が必要としているのは抄録集(3号)のみであることが多いため、アンケートに「3号(抄録集)のみ要」との項目を設ければ、印刷部数を大幅に減らすことができるかもしれないと意見を述べた。

平林アドバイザーが、学会誌の印刷については、学会とCBR社との契約であるため、理事会でアンケートの内容や発行部数の件など、承認を得る必要があると補足した。

中村理事が、今後の理事会で議題として提示するとしながら、CBR三輪氏に意見を求めた。

三輪氏が、すでにオンラインジャーナルは完成しているので、印刷部数の件は学会の意向に従うと回答した。

・次回委員会開催日程の件

今回は、7月14日 午前8時から京王プラザホテル(同日程で骨軟部腫瘍学会開催中)周辺にて

以上